

令和3年発行中学校社会科歴史的分野の教科書における西洋中近世史の扱いについて (特集
歴史教育と「歴史総合」)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): Special Issue, Junior High School, Western Medieval and Early Modern History, Textbooks, Education, Tohoku Gakuin University 作成者: 津田, 拓郎, 森, 悠人 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/25069

特集 歴史教育と「歴史総合」

令和3年発行中学校社会科歴史的分野の教科書 における西洋中近世史の扱いについて⁽¹⁾

津田 拓郎・森 悠人

1. はじめに

2022年度から高等学校の歴史教育においては、今までの「世界史A」、「世界史B」を必修とする体制から、近現代史のみを扱う「歴史総合」を必修する形へと転換がはかられる。注目すべきは、「歴史総合」においては前近代史を扱う記述が皆無となる点である⁽²⁾。すなわち、高等学校において新たに設けられる「世界史探究」を選択するもの以外は、前近代の外国史にダイレクトに触れる機会は中学社会の歴史的分野のみとなるのである。つまり、日本で教育を受けるものの大多数に関して、中学社会の歴史的分野における外国史教育が、前近代外国史に関する知識のほぼ全てを担うことになる。

このような問題意識に基づいて、本稿では2020年春に検定を通過した中学校社会科歴史的分野における、前近代西洋史、特に西洋中世及び近世への転換期に関する記述内容を分析する。筆者はすでに2019年3月に同様の調査を行っており、その際には特に「ルネサンス」を扱う頁を分析対象とし、それとあわせて中世のおわり（＝近世のはじまり）に関する記述も検討した⁽³⁾。その結果、多くの教科書において、西洋史の時代区分に関して誤解を生みかねない記述が見られることが明らかになった。詳細については前稿を参照していただきたいが、もっとも大きな問題は、西洋史関係の記述における「近世」の不在である。分析対象とした全ての教科書は、ルネサンスや宗教改革以降の時代が「近世」（ま

⁽¹⁾ 本稿は、西欧初期中世史を専門とする歴史学者の津田と、教育学研究科を修了し、複数の中学校での講師経験を有する森が、それぞれの専門的知識や実務経験を踏まえて共同執筆したものである。なお、本稿は森悠人による修士論文「中学校社会科教科書歴史分野における前近代西洋史の時代区分について」（北海道教育大学、2021年3月）をベースとするものであるが、その後の研究の成果をも盛り込み、大幅な加筆・修正を行った。全体の構成は津田が担当したが、全ての部分について津田・森双方の研究・分析結果が反映されているため、厳密に執筆部分を切り分けることは不可能である。

⁽²⁾ 事実上前近代の世界史を切り捨てる形になった「歴史総合」必修化を伴うカリキュラム改革の問題点については、津田拓郎・コンラート フレンツェル「日独の中等教育課程における歴史教育の現状と課題」、『史流』48号、2021年、59-84頁。

⁽³⁾ 森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」、『史流』47号、2020年、63頁、註2を参照。以下本文中では「前稿」と称する。

たは「初期近代」と呼ばれることに一切言及しておらず、生徒が「ヨーロッパ史においては産業革命・フランス革命前頃までを中世と呼ぶ」と誤解してしまいかねない作りとなっていたのである。西洋史の時代区分としての「近世」が学界において完全に定着して久しいことを考えるなら、こうした誤解のもたらす弊害は計り知れない⁽⁴⁾。

こうした教科書が生まれた理由の一つとして、(イタリア)ルネサンスを必ずしも断絶として捉えない歴史像が大きな役割を果たしているものと思われる⁽⁵⁾。中世を「暗黒時代」とみなし、ルネサンスが新しい時代をもたらしたという伝統的理解が多くの中世史家によって否定された結果⁽⁶⁾、ルネサンスに中世との連続性を強く見る歴史像が定着し、「中世のおわり」に関する理解が不明瞭になってきているのである。「中世のおわり」に関しては新大陸の「発見」を重視する立場や宗教改革を断絶と見なす立場など様々な学説が提示されてきたが、現在の学界における通説は、15～16世紀に生じた多方面における変革を通じて、中世がおわるというものであると言って良いだろう⁽⁷⁾。このように、通説において特定の年号や出来事が「中世のおわり」として提示されていない現状を踏まえた結果が、現在の中学校歴史教科書における「中世のおわりの不明瞭さ」と「近世の不在」をもたらしているものと思われる。

本稿では、前稿の分析結果を踏まえつつ、中学校における新学習指導要領施行にあわせて新たに採択された中学校社会科歴史的分野の教科書を分析し、各社の記述内容において何が変化し何が変化しなかったのかを明らかにした上で、批判的な分析を行っていく。本稿でも基本的に、時代区分の問題を中心に考察を進めるが、ルネサンスのみに対象を限定することなく、西洋中世及び中世から近世への転換期を扱う単元全体を視野に入れ、授業現場のあり方をも強く意識した形で、各社の教科書の内容・構成を分析した。今回検討の対象とした教科書は2021年(令和3年)に発行された7社全ての教科書である⁽⁸⁾。

⁽⁴⁾ 筆者の知る限り、16～17世紀を研究対象としている日本の西洋史研究者が「中世史家」を名乗っている事例は皆無である。研究者の手による書籍のタイトルにおいても、16世紀以降を扱った書物に「中世」の語が含まれることはない。通説と大きく異なる時代区分がもたらす弊害については、森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」、81-82頁でも扱った。

⁽⁵⁾ 時代区分においてルネサンスをどの程度重視するかの問題については、森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」、69-71頁。

⁽⁶⁾ こうした方向性を持つ研究は極めて多数にのぼるが、ここでは以下の2点のみを紹介しておきたい、小澤実「高校世界史教科書と中世ヨーロッパ—時代区分・舞台設定・グローバルヒストリー—」『じっしやう地歴・公民科資料』82、2016年、1-8頁 (<https://www.jikkyo.co.jp/download/detail/29/9992657452>) (2021年10月12日閲覧)；ウインストン・ブラック(大貫俊夫監訳)『中世ヨーロッパ—ファクトとフィクション』、平凡社、2021年。

⁽⁷⁾ 西洋史における中世から近世への転換の問題については、近藤和彦『近世ヨーロッパ』山川出版、2018年が、最新の研究成果を初学者にも分かりやすくまとめている有益である。

⁽⁸⁾ 日本文教出版『中学社会 歴史的分野』、帝国書院『社会科 中学生の歴史』、育鵬社『最新 新しい日本の歴史』、教育出版『中学社会 歴史 未来をひらく』、東京書籍『新しい社会 歴史』、山川出

2. 新学習指導要領における前近代外国史の取り扱いの変化と西洋中世史の位置づけの問題

教科書の分析を行う前に、2021年度より施行されている新学習指導要領における内容面の変化について簡単にまとめておきたい⁽⁹⁾。まず指摘すべきは、社会科の歴史的分野における時数が5時間増加し、地理的分野の時数が5時間減少したことである⁽¹⁰⁾。これは、高等学校における地理総合・歴史総合の必修化に伴う措置と考えられる。前近代外国史に関わる大きな変化としては、ギリシア・ローマの文明について、民主政治の観点から扱うこと⁽¹¹⁾、元寇の背景としてユーラシアの変化を扱うこと⁽¹²⁾、新航路開拓の背景となる「アジアの交易の状況やムスリム商人などの役割と世界の結び付き」に気付かせること⁽¹³⁾がそれぞれ明記された点を指摘できる⁽¹⁴⁾。これらの3点は、すでに旧学習指導要領のもとで検定を受けた教科書においても一部の出版社が扱っていた内容であるが、指導要領に明記されたことで、全ての出版社の教科書で扱われることとなった。また、「A 歴史との対話」の「(1) わたしたちと歴史」の中で、歴史上の人物や文化財、出来事などを時代区分と関わらせて考察し表現することが求められるようになっている点も指摘しておきたい⁽¹⁵⁾。

出版社『中学歴史 日本と世界』、学び舎『ともに学ぶ人間の歴史』（全て2021年発行）。

⁽⁹⁾ 「主体的・対話的で深い学び」の重視など、教育方法に関わる変化については本稿では扱わない。これについては、津田拓郎・コンラート フレンツェル「日独の中等教育課程における歴史教育の現状と課題」；津田拓郎・コンラート＝フレンツェル「中学校社会科歴史的分野における『主体的・対話的で深い学び』をめぐる諸問題—日本の中学校教員へのインタビューと日独比較を手がかりに—」、『史流』第49号、2022年（刊行予定）。

⁽¹⁰⁾ 「中学校学習指導要領（平成29年告示）」、63頁；教育出版「中学校社会 学習指導要領 改定の概要」（https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/chuu/shakai/files/cos13_noutline.pdf）（2021年11月17日閲覧）。

⁽¹¹⁾ 「世界の古代文明」の単元の内容の取り扱いの所に、「ギリシャ・ローマの文明について、政治制度など民主政治の来歴の観点から取りあつかうこと」が明記された、「中学校学習指導要領（平成29年告示）」、54頁。「ギリシア・ローマの文明」は旧学習指導要領では一切言及のなかった分野にあたる。

⁽¹²⁾ 「武家政治の成立とユーラシアの交流」の単元で身につけるべき知識として、「鎌倉幕府の成立、元寇（モンゴル帝国の襲来）などを基に、武士が台頭して主従の結び付きや武力を背景とした武家政権が成立し、その支配が広まったこと、元寇がユーラシアの変化の中で起こったことを理解すること」が記載されている、「中学校学習指導要領（平成29年告示）」、50頁。

⁽¹³⁾ 「ヨーロッパ人來航の背景」の単元の内容の取り扱いの所に、「新航路の開拓を中心に取り扱い、その背景となるアジアの交易の状況やムスリム商人などの役割と世界の結び付きに気付かせること」と明記された、「中学校学習指導要領（平成29年告示）」、55頁。

⁽¹⁴⁾ また、「中世の日本」の単元で「東アジアにおける交流」にも着目することも明記されている。その他の内容面における大きな変化としては、アイヌや琉球の文化や歴史に触れること、領土問題に触れることなどが明記されたことを指摘できる。新旧学習指導要領の変化については、教育出版「中学校社会 学習指導要領新旧対照表」（<https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/chuu/shakai/files/R3shakai-taishoNEW.pdf>）（2021年11月17日閲覧）を参考にした。

⁽¹⁵⁾ 「時期や年代、推移、現在のわたしたちとのつながりなどに着目して、小学校での学習を踏まえて歴史上人物や文化財、出来事などから適切なものを取り上げ、時代区分との関わりなどについて考察し表現すること」、「中学校学習指導要領（平成29年告示）」、48-49頁。旧学習指導要領でも「時代の区分やその移り変わり」、「年代の表し方や時代区分についての基本的な内容」を理解させるこ

なお、以下で示すように、多くの教科書ではイスラムの拡大、西洋中世、ルネサンス、宗教改革が2頁ないし4頁で扱われており、この部分が本稿の主たる分析対象となるが、それらのトピックの中で指導要領に明記されているのは、ムスリム商人の活動（通常イスラムの拡大の枠内で言及される）と宗教改革のみである。新学習指導要領になっても、中学校社会の歴史的分野における「目標」は「我が国の歴史の大きな流れ」の理解のままであり、「世界の歴史」は日本史の流れに直接関係してくる場合にのみ扱われるにすぎないのである⁽¹⁶⁾。指導要領解説を見る限り、ムスリム商人の活動や宗教改革は、ポルトガルやスペインによる新航路の開拓や鉄砲やキリスト教の伝来と南蛮貿易の活発化の背景として位置づけられているようである⁽¹⁷⁾。つまり、ムスリム商人の活動は、ムスリム商人の仲介を経ずにアジアとの貿易を可能とする新航路開拓の原動力として、宗教改革はイエズス会による世界宣教に伴う我が国への鉄砲・キリスト教伝来の前史として扱われるべきトピックとされているのである⁽¹⁸⁾。

3. 教科書分析

(1) 教科書分析の方針について

本稿の主たる分析対象はイスラムの拡大、西洋中世、ルネサンス、宗教改革を扱う単元

とは求められていたが、それを具体的な対象と結びつけて考察・表現することが新たに追加されている。

⁽¹⁶⁾ 「目標」の(1)に記載された、「我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解」という文言は旧学習指導要領から変わっておらず（「中学校学習指導要領（平成29年告示）」、48頁）、高等学校の必修科目から前近代外国史が削減されると同時に成立した中学校の新学習指導要領においても、前近代外国史分野の拡充は上で言及した数点のトピックのみにとどまっている。また拡充されたトピックはほぼ全てが、「我が国の歴史」に直接的に関わるものである（唯一ギリシア・ローマの歴史は我が国の歴史と直接結び付かないものだが、「民主政治の観点から」扱うことが明記されている）。こうしたカリキュラムの是非については、津田拓郎・コンラート・フレンツェル「日独の中等教育課程における歴史教育の現状と課題」で扱ったため、本稿では考察の対象としていない。

⁽¹⁷⁾ 学習指導要領の「内容の取り扱い」の部分には、「『ヨーロッパ人來航の背景とその影響』については、新航路の開拓を中心に取り扱い、その背景となるアジアの交易の状況やムスリム商人などの役割と世界の結び付きに気付かせること。また、宗教改革についても触れること」とあり、指導要領解説には、「中継貿易などでの中世以来のムスリム商人の活動などによる世界の結び付きに気付くことができるようにするとともに、ポルトガルやスペインによる新航路の開拓や宗教改革によるキリスト教世界の動きに伴って、鉄砲やキリスト教が伝来して南蛮貿易が盛んになり、日本の社会に影響を及ぼしたことを扱うようにする」とある、「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編」、105頁。

⁽¹⁸⁾ なお、ムスリム商人の活動は新学習指導要領で追加されたトピックだが、宗教改革は旧学習指導要領においても扱いが明記されていたものにあたる。ただし、旧学習指導要領では内容の取り扱いの所に、「宗教改革については深入りしないようにすること」との記載がなされていた、「中学校学習指導要領（平成10年12月告示、15年12月一部改正）」（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320117.htm）（2021年11月17日閲覧）。この文言は新学習指導要領からは削除されている。

である。その際に特に注意が払われるのは、以下の点についてである。

- ア) 西洋史における「中世」の範囲、特に中世のおわりと近世のはじまりについて、誤解なく学ぶことができる構成になっているか
- イ) 教科書の記述内容に通説と大きく異なるものや誤解を招きかねないものはないか
- ウ) 図版の選択や配置に問題はないか
- エ) 教科書中に記載された「問い」や「課題」に問題はないか

アについては、指導要領が明示的に扱うことを求めているトピックではないが、現在の学界における「近世」の定着度合いを考えるなら、不必要な、そして大きな悪影響をもたらしかねない誤解が生じるのを避けるために、授業の中ではっきりと教えるべき事項にあたると言って良い。

なお、本稿の分析対象となる分野は、小学校の歴史教育においては一切扱いのないものであるため、大多数の生徒にとっては全くなじみのないトピックを多数含むことが予想される。ヨーロッパとイスラム世界の1,000年以上に及ぶ歴史を2~4頁（1~2単位時間）で扱うというこの単元の性質を考えるなら、教科書に最新の学説にまで踏み込んだ内容を盛り込むことを期待するのは現実的ではない⁽¹⁹⁾。それゆえ本稿の分析においては、叙述内容が相当程度伝統的な歴史像に基づくものであっても、そのこと自体は問題視しないという方針をとっていることを断っておきたい。例えば、ほとんどの教科書は、キリスト教的価値観に支配された中世ヨーロッパと、ギリシア・ローマの古典古代的な価値観を重視するルネサンスを対比的に見る伝統的な歴史像を提示している。こうした歴史像はすでに多くの研究によって相対化されているが⁽²⁰⁾、本稿は新しい研究動向への言及が教科書中に盛り込まれていないという点を批判することはない。むしろ重視されるのは、「古典古代（ギリシア・ローマ）」が「キリスト教」と対比されるものとして提示されているということが、初学者たる生徒たちに誤解なく伝わる構成になっているかといった、通説の把握に関する点である。

⁽¹⁹⁾ 森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」、82-85頁の「あるべき教科書の姿とは」も参照のこと。なお、旧版の教科書を分析したものではあるが、最新の研究動向がどの程度教科書記述に盛り込まれているかについては、山田耕太・梅村尚樹・仲田公輔・須田牧子「世界史的視野で中学校歴史教科書の前近代史叙述を検討する」『歴史学研究』956, 2017年, 20-29頁が参考になる。

⁽²⁰⁾ 森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」、66-71頁を参照。

(2) 教科書における西洋中近世史の記述

日本文教出版

まず指摘できるのは、教科書全体の頁数が295頁から317頁へと増加しており、第2編～第4編までのタイトルが「古代までの日本」、「中世の日本」、「近世の日本」から「古代までの日本と世界」、「中世の日本と世界」、「近世の日本と世界」に変更されている点である⁽²¹⁾。これは新学習指導要領導入と時数増に伴って、世界史的内容が拡充されたことと対応しているものと思われるが、頁の増加幅は5時間の時数増の範囲を超えるものである。今回の改訂の結果、日本文教出版の教科書は全社の中でもっとも頁数の多い教科書となった⁽²²⁾。

本稿の主たる分析対象となるトピックは「① イスラム教の世界とキリスト教の世界—世界宗教の広まり—」（「第4編近世の日本と世界」の「1 中世から近世へ」に含まれている）の見開き2頁のみで扱われており⁽²³⁾、分量において旧版から大きな変更はない。副題の「世界宗教の広まり」は新たに付け加えられたものであり、本文部分の区切りも旧版における「イスラム教の世界の発展」と「アジアに向かうキリスト教徒」への2区分から、「イスラム教の世界の発展」、「キリスト教の世界の変化とルネサンス」、「宗教改革」への3区分へと変更され、「アジアに向かうキリスト教徒」に含まれていたトピックのうち、十字軍とルネサンスに関する記述が「キリスト教世界の変化とルネサンス」の部分に収録され、「宗教改革」と切り離された。ただし本文の記述内容自体については、細かな変更が見られるのみである⁽²⁴⁾。図版や地図といった資料には一部変更が見られた。「十字軍の兵士」、「イスラムの商船」、「モナ＝リザ」、「ダビデ像」が削除され、「イスラム商人の船」は特集頁「地図で見る世界の動き—15世紀の世界と日本」の頁に移動されている⁽²⁵⁾。左上に掲載された地図「イスラム教とキリスト教の世界」も2つの世界の範囲と第1回十字軍の経路の情報のみを掲載する形に変更されており、旧版に見られた「イスラム商人の交易路」の情報は「地図で見る世界の動き」の頁に組み込まれている⁽²⁶⁾。新たに追加された資料としては、

⁽²¹⁾ なお、第5編と第6編は旧版においても「近代の日本と世界」、「現代の日本と世界」と題されており、新版においてもこの部分のタイトルは変更されていない。

⁽²²⁾ 日本文教出版の「学習指導計画作成資料」では、特集頁には時数の割り当てがないほか、1単位時間で3～4頁を扱う形になっている単元も多いため、実際の授業においては教科書中の多くの情報を省略せざるを得なくなる可能性が高い、<https://www.nichibun-g.co.jp/textbooks/c-shakai/rekishi/> (2021年11月17日閲覧)。

⁽²³⁾ 日本文教出版『中学社会 歴史的分野』、2021年、112頁-113頁。

⁽²⁴⁾ 三大宗教誕生の部分の記述との重複が削除され、オスマン帝国が「東ローマ（ビザンツ）帝国」を滅ぼしたという情報が追加された。

⁽²⁵⁾ 日本文教出版『中学社会 歴史的分野』、2021年、110-111頁。「ムスリム商人の船」として掲載。

⁽²⁶⁾ 日本文教出版『中学社会 歴史的分野』、2021年、110-111頁。

「神話の三美神の比較」と題された「古代」、「中世」、「ルネサンス」⁽²⁷⁾の「三美神」の図像と略年表（「イスラム教とキリスト教の世界の主な動き」）がある。また、学習課題などにもマイナーチェンジが見られた。

ここまで見てきた変更点の多くは、情報がより整理された形で提示される効果をもたらしており、基本的に肯定的に捉えるべきものであると言って良い。ただし、西洋史の時代区分について述べるなら、本文中の記述内容が変わらないまま、新たに「三美神の比較」が追加されたため、その点において扱いに注意が必要となっている。「神話の三美神の比較」部分には「資料活用」として「古代ギリシャ・ローマの三美神の姿が、神に祈るような中世をへて、ルネサンス期に復活していることに注目しましょう」と付記されており、キリスト教的中世と古典古代的な要素が復活したルネサンスを対比的に見る、伝統的なルネサンスイメージに従った説明がなされている。他方で、旧版と同じく本文部分には「中世」「近世」といった時代名称への言及が一切見られない⁽²⁸⁾。ルネサンスのみを境目としてそれ以降を近世と断言することへの抵抗がこうした曖昧な記述を生んでいるものと思われるが、「第1編 私たちと歴史」の「年代・時代区分のあらわし方」においては「時代区分の方法」の一つとして「原始、古代、中世、近世、近代、現代」という6区分が「社会の仕組みの特長によって時代を大きく分ける方法です」として提示されているのであり⁽²⁹⁾、「三美神の比較」の資料が明確にルネサンスを中世からの断絶として提示していることをも踏まえるなら、本文中でも何らかの形で西洋史における近世に言及するべきであった⁽³⁰⁾。この教科書を用いて三美神の比較を取り上げる際に、教師は「(色々な説があるが)ルネサンス以降、西洋史では『近世』にはいると考えて良い」と付言するか、授業の終盤に「ルネサンスや宗教改革などを通じて、西洋史は『近世』にはいる」と明言する必要がある。

時代区分以外で注意が必要なのは、「深めよう」として新たに加えられた「ルネサンスは、イスラム文化などと、どのような関連があったのでしょうか」という問いである。イタリア・ルネサンスが起こった背景として、十字軍などによるイスラム圏との接触とそれに伴

⁽²⁷⁾ ボッティチェリの「春」の部分拡大図が掲載されているが、キャプションには単に「ルネサンス」とだけ記載されている。

⁽²⁸⁾ この教科書では「キリスト教の世界の変化とルネサンス」の部分の第1段落で十字軍の情報が語られ、第2段落でルネサンスが扱われているため、伝統的な時代区分に従うならここが中世から近世への転換点ということになる。

⁽²⁹⁾ 日本文教出版『中学社会 歴史的分野』、2021年、11頁。この部分で具体的な時期として示されているのは日本史における時代区分のみであり、巻末の年表でも西洋史の時代区分は示されていない。

⁽³⁰⁾ なお、この教科書では、西洋史に関する「近代」の始まりも全く強調されていない。日本史以外の時代区分には言及しないという方針が垣間見えるが、「古代」や「中世」といったキャプションを付しつつ三美神の比較の資料を提示している以上、西洋史の時代区分に言及しないという態度には問題があるだろう。

う古典古代（古代ギリシア・ローマ）文化の流入を重視する考え方自体は学界でも定着しているが、ルネサンスとイスラム文化の間に「どのような関係があった」という形の問いかけに端的に答えることは容易ではない（問いの中に、「イスラム文化など」という曖昧な文言が含まれている点も多様な解釈を可能としてしまっている）。この問いに対応すると思われる教科書本文の記述は、「十字軍の影響もあって、14世紀ごろから、ヨーロッパではイスラム文化や古代ギリシャやローマの文化への関心が高まりました。そして、これまでのキリスト教の教えにとらわれない、自由でいきいきとした文化が生まれました。これをルネサンス（文芸復興）といいます」となっている。「十字軍の影響『も』」とすることで、十字軍とイスラムとの接触のみがルネサンスをもたらしたという形の因果関係の単純化を避けることができている点は大いに評価に値するが、この部分のみからでは、なぜ十字軍の影響を受けると「古代ギリシャやローマの文化」への関心が高まるのかが判然としない。これについては、見開き左下の「歴史+α イスラムの文化」のコラム中に、「ギリシャやローマ、インドなど、東西の文化を取り入れたイスラム世界では、文化も大きく発展しました。医学や哲学などでは、古代ギリシャの学問が受け継がれ…」という説明があるが、この部分に気づくことができた生徒以外は、「深めよう」の問いに端的に答えることは困難だろう。むしろ問いかけ方に引きずられて、「ルネサンスによりヨーロッパでもイスラム文化が花開いた」といった解答を出してしまう生徒も一定数存在するのではないだろうか。こうした答えに対して教師が適切な訂正・解説を加えるためには、教師の側にそれなりの予備知識が求められることとなる⁽³¹⁾。

他方で、他社の教科書と比較して優れている点もある。この教科書においても、西洋中世（と中世から近世への転換期）についての記述が「第4編 近世の日本と世界」に収められてしまっているもの、その部分の章名は「1, 中世から近世へ」であるため、記述内容に合致したものとなっている。中世に関する図版や地図を見開き左側に集中させ、ルネサンス以降の図版を見開き右側に集中させる構成もよく工夫されたものであり、（本文中に「中世」があらわれないこともあって）いくつかの教科書が抱える、「フランス革命ごろまでを中世と誤解してしまう」問題は、この教科書では比較的生じにくいといえるかもしれない。ギリシア・ローマの文化が多神教文化であり、キリスト教文化と対比されるものである点が強調されていることも⁽³²⁾、ルネサンスの意味を生徒に理解させる際には

⁽³¹⁾ ルネサンスにおける東方の影響については、森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」、71頁、註28であげた文献を参照のこと。

⁽³²⁾ 日本文教出版『中学社会 歴史的分野』、2021年、27頁。こうした対比を正規の頁で扱っているのは日本文教出版の教科書だけである。

プラスにはたらくに違いない。ここでは、教科書中にも参照指示があるように、24-27頁の記述を振り返りながら活用することで、より理解が深まるだろう⁽³³⁾。

教科書全体の中で「① イスラム教の世界とキリスト教の世界—世界宗教の広まり—」の単元の位置づけを見ると、この部分は、イスラムの発展⇒十字軍⇒ルネサンス⇒航海技術の発展⇒アジアやアメリカへの航海という流れと、宗教改革⇒イエズス会の成立⇒アジアやアメリカ大陸への布教という流れの2本立ての構成となっており、ルネサンスまでの記述と宗教改革の記述を別個のトピックとして提示しつつ、どちらも新航路開拓を扱う次の単元に接合させる形となっている。こうした構成は他社の教科書でも一般的なものにあたり、本文の記述も通説を大きく逸脱していない。

以上を踏まえ、日本文教出版の教科書を用いる際の注意点をまとめると以下のとおりとなる。

- ・西洋史の時代区分において、西ローマ帝国崩壊ごろ〜ルネサンス・宗教改革ごろまでが中世とされており、それ以降は近世と呼ばれることを教師が補足する必要がある
- ・「深めよう」を取り上げる場合には相当の準備が必要

帝国書院

教科書全体の頁数が全268頁から全292頁へと大幅に増大しており⁽³⁴⁾、今回の改訂における増加幅としては、教育出版と並んで最大となっている。各章のタイトルは、「第1章 古代 古代国家の成立と東アジア」、「第2章 中世 武家政権の成長と東アジア」、「第3章 近世 武家政権の展開と世界の動き」、「第4章 近代（前半）近代国家の歩みと国際社会」、「第5章 近代（後半）二度の世界大戦と日本」、「第6章 現代 現在に続く日本と世界」で、旧版と同一であり（ただし旧版では「章」ではなく「部」であった）、東アジアを超えた「世界」を視野に入れていることが明示されるのは近世以降となっている⁽³⁵⁾。

今回の改訂を経ても、本書の分析対象となるトピックに与えられた紙幅は、旧版同様見開き2頁のみであり、内容の拡充は見られなかった⁽³⁶⁾。旧版から変化した部分としては、

⁽³³⁾ 旧版では註における言及のみにとどまっていたギリシア・ローマ文明に見開き2頁（24-25頁）が与えられたことにより、ルネサンスの単元もより教えやすくなっている。

⁽³⁴⁾ 教科書2頁を1単位時間で扱うとすると、単純計算で12時間分の分量が増えたこととなり、新学習指導要領における5時間増を踏まえても、7時間が不足することとなる。帝国書院が示している「年間指導計画書」を見る限り、1時間で4頁進む部分を増やすことで対応しているようである、<https://www.teikokushoin.co.jp/teacher/junior/index.html>（2021年11月17日閲覧）。

⁽³⁵⁾ なお、「古代」や「中世」といった時代名称は、目次部分には記載がなく、本文頁のタイトルの部分にのみ付されている。

⁽³⁶⁾ 帝国書院『社会科 中学生の歴史』、2021年、94頁-95頁。なお、ここで扱う部分の直後に記載されている大航海時代関係の部分は2頁から4頁へと増加しており、地図が大型化されたほか、コロ

まずタイトルや見出しの修正を指摘できる。旧版ではこの見開きのタイトルは「1 イスラムの拡大とヨーロッパ」であり、本文部分の見出しは「イスラムの発展と十字軍」、「新しい文化と芸術」、「信仰の見直し」であったが、新版においては見開きのタイトルが「1 ヨーロッパの変革」、本文部分の見出しが「イスラムとの交流とヨーロッパ」、「新しい芸術と技術」、「信仰の見直し」に変わっていて、明確に「ヨーロッパ」を主語にした構成への転換が意図されている。ただし、本文部分の記述内容に一定の変化が見られたのは「イスラムとの交流とヨーロッパ」の部分だけであった。具体的には、イスラムの成立、西アジアや北アフリカへの拡大に関する情報が削減され、イスラム商人の活動についての記述が修正されていることを指摘できる。イスラムの成立と発展については、新版において情報量が増えた「仏教・キリスト教・イスラム教の誕生」の頁との内容の重複を避けたものと考えられる⁽³⁷⁾。ここで注目したいのは、新学習指導要領で扱いが明記されたイスラム商人(指導要領では「ムスリム商人」)の記述に関する変化である。旧版でイスラムの発展に言及する際に記載されていた「イスラム商人は、インド洋から南シナ海にかけての海の道を利用し、貿易の担い手として活躍しました」という文言は新版からは削除されており、やや文言を変えつつ「大陸の影響を受けた天平文化」の部分へと移動された⁽³⁸⁾。また、十字軍をきっかけとする「イタリア商人とイスラム商人の貿易」の活発化とそれに伴って天文学などの「進んだ技術や学問」がヨーロッパに紹介されたことに言及する部分に、「ユーラシア大陸を広く行き交うイスラム商人」という表現が加わり、「天文学」などの学問には、「彼らが航海などでつちかった」という枕詞が新たに付されている。教科書の複数の箇所ですイスラム商人の活躍に言及するという方針自体には異論はないが、「1 ヨーロッパの変革」の部分にも、それに続く「2 大航海時代の幕開け」の部分にも、天平文化の單元への参照指示が打たれていないことには注意が必要である⁽³⁹⁾。

図版資料における変更としては、三大宗教の頁と重複を避けるためにイスラム教の広まりの地図が削除されており、かわりに羅針盤とアストロラーベの写真が掲載された。また、「750～1600年ごろのできごと」の略年表のかわりに「ミケランジェロ作『最後の審判』」

ンプス以前のアメリカ大陸における文明に関する記述が追加されている、同 96-99 頁。

⁽³⁷⁾ 帝国書院『社会科 中学生の歴史』、2021年、22-23頁。旧版では「ヨーロッパで芽生えた文明」の見開き2頁でギリシア・ローマの文明とキリスト教・イスラム教の成立がまとめて扱われていた。新版では指導要領改訂に伴って、「ギリシャとローマの政治と文明」に見開き2頁が与えられたため、三大宗教の成立も単独で見開き2頁で扱われるようになっている。

⁽³⁸⁾ 帝国書院『社会科 中学生の歴史』、2021年、42-43頁。

⁽³⁹⁾ 大航海時代の頁における「イスラム商人」の下に記載された参照指示は2頁前の「ヨーロッパの変革」の部分を示しており、「ヨーロッパの変革」の頁の「イスラム勢力」の下にある参照指示は「仏教・キリスト教・イスラム教の誕生」の頁を示している。双方において、天平文化の頁への参照指示をも記載すべきであったと思われる。

が掲載されている。他方で「イスラムの国での研究の様子」の資料や、3つの時代の三美神、宗教改革関係の図版には大きな変化は見られなかった。

前稿でも指摘したとおり、この教科書では「古代ローマ」、「中世」、「ルネサンス」の三美神の絵画を比較する資料の下に、中世とルネサンスを対比的に見るキャプションが付されているながらも⁽⁴⁰⁾、本文中では「中世」も「近世」も言及されないため、西洋史の時代区分のあり方については教師が授業内で補足説明する必要性が生まれてしまっている⁽⁴¹⁾。また、見開き頁左上の大見出しが「第3章 近世 武家政権の展開と世界の動き」となっているが、本文冒頭の「イスラムとの交流とヨーロッパ」の部分は中世に関するものであるという問題も、旧版に引き続き未解決であった。巻末の年表に西洋史の時代区分が記載されていないことも同様である。この教科書においても、冒頭の「年代の表し方と時代区分」の部分に「古代・中世・近世・近代・現代」への5区分が掲載されていることを考えるなら⁽⁴²⁾、西洋史における中世や近世にも言及があつてしかるべきであったと思われる⁽⁴³⁾。

時代区分以外で注意が必要なこととして、ルネサンス部分の記述における「人間の個性や自由を表現しようとした古代ギリシャ・ローマの文化」に関するものを指摘できる。これは当然、中世に支配的であったキリスト教的価値観と対比されるべきものとして言及されているのだが、予備知識を一切持たない生徒がこの教科書からそうした対比を読み取るのは極めて困難であると言わざるを得ない⁽⁴⁴⁾。そもそもこの教科書では、ローマの宗教が多神教だったことへの言及が一切ないまま、三大宗教の部分でキリスト教がローマ帝国で生まれ、ローマ帝国の国教となったという事実が示されているため⁽⁴⁵⁾、「ローマ文化＝キリスト教文化」と考えてしまう生徒がいてもおかしくないのである。そうした生徒が、この部分でルネサンスが「新しい風潮」として取り上げられている理由を理解することは困

⁽⁴⁰⁾ 「中世では人間的な個性や身体の美しさを表すことは、慎むべきものとされていましたが、ルネサンスのころになると、三美神は盛んに描かれるようになりました」、帝国書院『社会科 中学生の歴史』、2021年、95頁

⁽⁴¹⁾ この部分に続く「2 大航海時代の幕開け」では、香辛料や絹織物を貴重視した人々として「古代や中世のヨーロッパの人々」への言及があるが、「古代」や「中世」がいつのことを指すのかに関する説明は一切ない、帝国書院『社会科 中学生の歴史』、2021年、96頁。

⁽⁴²⁾ 帝国書院『社会科 中学生の歴史』、2021年、4頁。「人々の暮らしのあり方や、社会のしくみによって時代を大きくとらえ、歴史を分けるやり方が広く使われています。本書でも、この区分で章を分けています」と解説されている。なお、旧版ではこの部分の時代区分は「原始」を含む6区分であった。

⁽⁴³⁾ 西洋史における近代については、「市民革命の始まり」の頁で「近代化」が太字で示されている、帝国書院『社会科 中学生の歴史』、2021年、148頁。

⁽⁴⁴⁾ 「キリスト教が人々の精神的な支えとなっていたヨーロッパ」や「ヨーロッパの生活や文化は、カトリック教会の影響を強く受けていました」という記述は見られ、ルネサンスにより「新しい風潮」が生まれたという説明もなされてはいるが、2つの時代の文化が大きく異なる点は、他社よりも強調されていないように見える、帝国書院『社会科 中学生の歴史』、2021年、94頁。

⁽⁴⁵⁾ 帝国書院『社会科 中学生の歴史』、2021年、23頁。

難であり、教師がしかるべき形で補足説明を行う必要が生まれてしまっている⁽⁴⁶⁾。

教科書全体の流れの中で、「1 ヨーロッパの変革」の部分は、これに続く大航海時代の記述の前史として位置づけられており、この点は他社の多くの教科書と同様である。具体的には、ルネサンスの所で「火薬・羅針盤・地球球体説・航海術」に言及し、宗教改革の所でカトリックの対抗改革とイエズス会による海外布教に言及することで、ヨーロッパの世界進出に関する記述に接合させる構成となっているのである。ただし、「信仰の見直し」の部分冒頭の記述が、十字軍の失敗⇒教会の権威低下と資金不足⇒免罪符の販売⇒宗教改革というストーリーになっている点には注意が必要である。この部分の記述が教科書全体の流れから「浮いて」しまわないようにと工夫した結果の記述なのだろうが、こうした単純化は「十字軍の失敗が宗教改革をもたらした」との誤解を生み出しかねない点で大きな問題があると言わざるを得ない。十字軍の失敗はせいぜいのところ宗教改革をもたらした遠因の一つと見なされるべきであり、ここは他社の教科書のように、「カトリック教会の権威低下と免罪符販売」のみを記載すべきであった。

また、見開き全体の「学習課題」として示されている「キリスト教に基づいたヨーロッパの文化や社会は、イスラム商人との交流により、どのように変化していったのだろうか」の取り扱いにも注意が必要である。この教科書の記述に従うなら、高い水準の学問や技術の導入と貿易による富の蓄積、それに伴うルネサンス文化の開花といったことを答えるべき課題となろうが、ここからは宗教改革に関する内容がすっぱり抜け落ちてしまうこととなるのである⁽⁴⁷⁾。また、教科書本文は貿易やイスラム文化の影響だけでルネサンスが生じたような書き方にはなっていないが、この学習課題に取り組むことで、生徒が「イスラム商人との交流でルネサンスが起こった」といった形に因果関係を単純化しすぎてしまう恐れもある。こうした問題を抱えていることを踏まえるなら、実際の授業においては教師自身が独自に課題をたてることが望ましいと言わざるを得ない⁽⁴⁸⁾。

⁽⁴⁶⁾ また、キリスト教的価値観の中世とルネサンスを対比的に説明する場合は、ルネサンス美術の例として「ボッティチェリ作『春』」と並んで示されている「ミケランジェロ作『最後の審判』」がキリスト教を題材としていることに関して、さらなる補足説明が必要となる点にも注意が必要である。その際には、本文中やキャプションに記載があるとおり、しばしば教皇がルネサンス絵画のパトロンとなったことを元に説明することとなろうが、その結果「ルネサンス＝古典古代≠キリスト教」という単純な図式は成り立たないということをさらに解説する必要が生まれてしまうのである。もちろん十分な時間がある場合は、「最後の審判」が、初期ルネサンス芸術が教会の支援のもとで花開いたという事実を教えるきっかけとなり、単純な「ルネサンス≠キリスト教」という理解を相対化するための手がかりとして有利にはたらくこともありえるだろう。

⁽⁴⁷⁾ この教科書の記述のように「十字軍が宗教改革をもたらした」という因果関係を想定するにしても、「イスラム商人との交流」の角度から宗教改革を説明することはできない。

⁽⁴⁸⁾ 例えば、表題が「ヨーロッパの変革」となっていることを踏まえ、学習課題は「ルネサンスや宗教改革を通じて、ヨーロッパはどのように変化していったのだろうか」といったものにし、イスラム商人の活動などについては、見開き右下の「確認しよう」や「説明しよう」を通じてまとめさ

以上を踏まえ、帝国書院の教科書を用いる際の注意点をまとめると以下のとおりとなる。

- ・西洋史の時代区分において、西ローマ帝国崩壊ごろ～ルネサンス・宗教改革ごろまでが中世とされており、それ以降は近世と呼ばれることを教師が補足し、「1 ヨーロッパの変革」の見開きの中では、「イスラムとの交流とヨーロッパ」の部分のみが中世に属することを伝える必要がある
- ・イスラム商人の活動について、天平文化の部分でも扱ったことを振り返る必要がある
- ・ルネサンスにおいて理想とされた「古代ギリシャ・ローマの文化」がキリスト教以前の多神教的文化であり、中世のキリスト教的文化とは対比されるべきものとして言及されていることを教師が補足する必要がある
- ・十字軍の失敗（のみ）が宗教改革の原因となったかのような記述について、教師が補足説明を行う必要がある
- ・「学習課題」をそのまま用いると宗教改革の部分をカバーできないのみならず、因果関係の単純化を強化してしまうため、教師自身が新たな課題を考える必要がある

育鵬社

この出版社の教科書においては、今回の改訂に伴う頁数の増加は12頁（全290頁から全302頁へ増加）であり、5時間の時数増とほぼ対応した分量増となっている。各章のタイトルは旧版と変わっておらず、「原始と古代の日本」、「中世の日本」、「近世の日本」、「近代の日本と世界」、「二度の世界大戦と日本」であり、近代以降の部分についてのみ、世界史を意識したタイトルとなっている。本稿の分析対象となる部分の記述についても大枠では変化はない。具体的には、「中世ヨーロッパと十字軍」は「第2章 中世の日本」の中の特集頁「このころ世界は② ユーラシアを一つにつないだモンゴル」の中で「イスラム世界の拡大」とともに扱われており⁽⁴⁹⁾、「第3章 近世の日本」の中の特集頁が「このころ世界は③ ルネサンスと宗教改革」⁽⁵⁰⁾となっている。「このころ世界は③」の直前の見開き頁「27 ヨーロッパ人の世界進出」（「第3章」の中の「第1節 ヨーロッパの出会い」におけるはじめの単元）⁽⁵¹⁾において、大航海時代と宗教改革が扱われている点も旧版と同様であり、この部分の記述内容の変化も、多少のマイナーチェンジのみである。ただし、「カトリッ

せる方法が考えられる。

⁽⁴⁹⁾ 育鵬社『最新新しい日本の歴史』、2021年、84-85頁。前稿における「この教科書は中世ヨーロッパには全く言及しておらず」という記述（森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」、73頁、註29）は誤りであった。ここにお詫びして訂正したい。

⁽⁵⁰⁾ 育鵬社『最新新しい日本の歴史』、2021年、110-111頁。

⁽⁵¹⁾ 育鵬社『最新新しい日本の歴史』、2021年、108-109頁。

ク教会」に付されていた「ローマ教皇を首長とする」という説明が削除されていることには注意が必要である。

この教科書でも、他社と同様に冒頭の「年代や時代区分の表し方」の所に原始～現代までの6区分が言及されているが⁽⁵²⁾、西洋史の時代区分については当該箇所や教科書本文に説明がない。「このころ世界は②」では「中世ヨーロッパ」が言及されるものの、近世への言及はなく、中世の開始時期・終了時期についての情報も見られない⁽⁵³⁾。特集頁を扱う場合には、それぞれで扱われているのが中世及び中世から近世への転換点にあたるトピックであることについて、教師が付言するのが良いだろう。また、3つの三美神の比較の所⁽⁵⁴⁾には、それぞれ「1世紀の三美神」、「14世紀の三美神」、「15世紀の三美神」とのみ記載されているため、それぞれがどの時代の事例として提示されているのかに気付きにくい形となっている。それぞれの絵画の帰属する時代自体を突き止めることも課題として捉えることも可能であるが、「1世紀」の事例が古代ローマのものであることを読み取るために十分な情報が提示されていないことや、本文中でルネサンスが起こった時期として「14, 15世紀ごろ」と記載されていることを考えるなら、課題の前後に教師が適切な補足説明を加える作業が必要となろう。なお、それぞれの特集頁は教科書における「中世」と「近世」への章分けに対応した場所におかれているため、他社の教科書で生じがちな「西洋中世と西洋近世の混同」という問題は起こりにくくなっている。

ただし巻末の年表における「西洋」の時代区分は、通説と大きく異なったものとなっていて、扱いには注意が必要である。古代と中世の境目が、395年ごろから7世紀末ごろまでとなっていることについては、ビザンツ帝国をも考慮した結果であると考えればわからなくもないが⁽⁵⁵⁾、中世のおわりが1620年ごろから1789年までの期間となっていること⁽⁵⁶⁾、中世に続く時代が近世ではなく近代となっていることは大いに不可解である。これ

⁽⁵²⁾ 育鵬社『最新新しい日本の歴史』, 2021年, 12頁。

⁽⁵³⁾ 例えば「このころ世界は③」の冒頭では「日本が中世から近世へ向かうころ」という記述が見られるが、西洋史においてこの時代が何と呼ばれるのかについての情報は記載されていない、育鵬社『最新新しい日本の歴史』, 2021年, 110頁。

⁽⁵⁴⁾ 育鵬社『最新新しい日本の歴史』, 2021年, 110頁。

⁽⁵⁵⁾ 古代から中世への転換期がおわるとされている時期について、年表中には西洋史に関する事件は記載されていない(676年の「新羅が朝鮮半島を統一」の部分あたりまでとなっている)。この教科書でビザンツ帝国への言及は一切見られないため、前近代史に関してはこの教科書における「ヨーロッパ」は事実上「西ヨーロッパ」の意味で用いられている。西ヨーロッパにおける「中世」の始まりについては、多くの批判がなされたいまでも476年の西ローマ帝国崩壊を基準とする見方が通説であり続けていると言って良い。古代から中世への転換に関する新しい見方については、さしあたりピーター・ブラウン(後藤篤子編訳)『古代から中世へ』山川出版社, 2006年を参照のこと。冒頭の編訳者による解説も有益である。

⁽⁵⁶⁾ 1620年ごろの所には特定の事件は記載されておらず、何を根拠にこの時期が中世から近代への転換期の始まりとされているのかは判然としない。1789年のフランス革命勃発を近代の始まりとする見方は比較的一般的な時代区分法であるといえるが、この年表のように近代への転換期に幅を持

は「年代や時代区分の表し方」の部分で「近世」の存在を明言していることとも矛盾するのみならず、現在の学界における一般的な時代区分とも大きく食い違っている。

年表部分に大きな問題はあるが、この教科書は、特集頁をも考慮に含めるなら、本稿で扱う分野に関する記述が極めて充実した教科書での一つであると評価できる。特に「ルネサンスと宗教改革」を扱う部分には、他社の標準的な記述内容を大きく上回る情報量が含まれており、特集頁という性質上教科書全体の流れの中に無理に組み込む必要がないためもあってか、因果関係を単純化しすぎるような筆致も見られなかった。今回の改訂で「ギリシャとローマの文明」に新たに見開き2頁が与えられたことや⁽⁵⁷⁾、特集頁で古代ローマが多神教文化であり、キリスト教が一神教文化であることが説明されていることも⁽⁵⁸⁾、ルネサンスを教える際には有利にはたらくだろう。

他方で正規の頁をベースに考えると、西洋中世もルネサンスも一切扱っていないことになり、他社と比べるとかなり情報量が少なくなってしまうという点には注意すべきである。指導要領上に扱いのないトピックを特集頁にまとめることで、情報量の増大と誤解を生みにくい構成が実現されている点で、こうした構成は教科書のあり方として一つの可能性を示すものと評価することもできるが、育鵬社の「歴史的分野年間指導計画」⁽⁵⁹⁾を見る限り、「このとき世界は」は指導計画の時数外となっていて、実際の授業現場で省略されてしまう可能性が高い点は、中世史家としては大いに残念である。

以上を踏まえ、育鵬社の教科書を用いる際の注意点をまとめると以下のとおりとなる。

- ・特集頁の「このころ世界は」を扱わない場合、西洋史関係の情報量が一般的な教科書と比べて相当程度少なくなってしまうことに留意する必要がある
- ・特集頁を扱う場合、西洋史の時代区分（特に中世から近世への転換）についても付言する必要があるが、その際には巻末年表の「西洋」の部分で示された時代区分が通説と大きく異なっていることにも注意を払う必要がある
- ・特集頁は情報量が多く、予期せぬ角度からの質問に答える準備が必要となる可能性があるため、教師は最低でも高校世界史教科書レベルの予備知識を有しておく必要がある
- ・三美神の資料を比較させる場合には、教科書のみからは読み取りにくい情報について教師が適切に補足する必要がある

たせる場合は、神聖ローマ帝国崩壊あたりまでを含めるのが一般的であると思われる。

⁽⁵⁷⁾ 育鵬社『最新新しい日本の歴史』、2021年、32-33頁。

⁽⁵⁸⁾ 育鵬社『最新新しい日本の歴史』、2021年、39頁。

⁽⁵⁹⁾ http://www.ikuhosha.co.jp/textbook_R3/shidou.html（2021年11月17日閲覧）。

教育出版

上述のとおり、この教科書は全 274 頁から全 298 頁へと大幅に頁数が増加しており、帝国書院と並んで、今回の改訂で増えた頁数をもっとも大きなものにあたるが⁽⁶⁰⁾、本稿の主たる分析対象となるトピックを扱う頁には大きな変更は見られなかった。ただし、本稿の主たる分析対象ではないが、「広がる国際交流—7-8 世紀の世界」の見開き 2 頁における「イスラム世界のおこりとイスラム世界」が「イスラムの拡大」に変わっており⁽⁶¹⁾、「イスラム世界では…陸路だけでなく海上の交通も発展し…」や「バグダッドは、世界各地の産物が集まる国際都市として栄えました」といった情報が追加された。この変化は、古代の章において、古代ギリシア・ローマに新たに見開き 2 頁が与えられたことで、三大宗教誕生も見開き 2 頁で扱うことが可能となり、イスラム教の誕生がその部分に組み込まれたことによるものである⁽⁶²⁾。

この教科書ではすでに旧版において、西洋中世史とイスラムの発展に見開き 2 頁、ルネサンスと宗教改革にも見開き 2 頁が与えられており、これらのトピックに他社の倍の紙幅を与えていた。そうした扱いは新版でも変わっておらず、記述内容や図版においても細かなマイナーチェンジ以外、ほぼ変化は見られなかった。前稿でも指摘したとおり、この教科書では、ルネサンスと宗教改革を扱う見開きのタイトルが「中世からの脱却」となっているため、他社の多くの教科書で生じがちな中世と近世の混同が起りにくくなっており⁽⁶³⁾、時代区分に関する予備知識を持たない生徒にも使いやすい構成であると言って良い⁽⁶⁴⁾。ただし、「中世ヨーロッパ」が言及される頁が教科書全体の構成においては「第 4 章近世の日本と世界」に含まれているという問題や、西洋史の文脈では近世への言及が（巻末年表を除いて）一切見られないという問題は、旧版に引き続き残されている。前者については、タイトルにおいて明確に時代の移り変わりが示されているため大きな問題は生じないだろうが、「中世からの脱却」を経てはじまる時代が近世と呼ばれることについては、

⁽⁶⁰⁾ 教育出版の年間指導評価計画（案）は、基本的に見開き 2 頁を 1 時間でとり扱う形をとっているが、特集頁や資料の読み取りの頁は指導計画中の正規の時数に含まれていない、<https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/r3chuu/rekishi/download/index.html#09>（2021 年 11 月 17 日閲覧）。なお、教育出版では旧版段階ですでに、近世より前の時代を扱う章の名称も「原始・古代の日本と世界」、「中世の日本と世界」といった形で、「世界」を射程に入れたものとなっていた。これは新版においても維持されている。

⁽⁶¹⁾ 教育出版『中学社会 歴史 未来をひらく』、2021 年、39 頁。

⁽⁶²⁾ 旧版では仏教はアジアの古代文明の見開きで扱われており、ローマ帝国とキリスト教が古代の大帝国の出現の頁でまとめて扱われていた。

⁽⁶³⁾ 巻末の年表における「西洋」の時代区分においては、ルネサンス開始ごろから 16 世紀中頃までが中世から近世までの切れ目として提示されており、この点も旧版と変わっていない。

⁽⁶⁴⁾ 森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」、74-75 頁。同、83 頁註 45 では、「教育出版のものは、現行の教科書の中で…われわれが考えるあるべき姿にもっとも近いものであると良いかもしれない」と評価した。

教師が補足する必要がある⁽⁶⁵⁾。また、三美神を比較させる資料に古代の三美神が欠けている点も旧版から変わっていない。

本文の記述においては、ルネサンス・宗教改革を全体のストーリーに無理矢理組み込もうとする態度は見られず、それぞれの出来事間の因果関係を過度に強調する筆致とはなっていないため、それぞれの部分の記述は、通説的理解から見ても問題のない内容となっていると言って良い。大枠では、中世ヨーロッパとイスラム世界を扱う見開き2頁が、「中世からの脱却」(ルネサンスと宗教改革)の見開き2頁の前史となっており、そこで学んだ内容がこれに続く大航海時代の前史となっていて、本文をよく読めば、それぞれの単元が巧みに接合されていることに生徒が気づくことができるようになってきている。それぞれの単元の結び付きを生徒自身に読み取らせるような授業も可能であろう。また、今回の新版では古代ギリシア・ローマの記述が大幅に拡充されたこともあり、ルネサンスについて旧版以上に生徒が理解しやすくなる効果も生まれている⁽⁶⁶⁾。教育出版の教科書は、正規の頁で前近代世界史に関する記述を豊富に含んでおり、記述内容にも大きな問題が見られないため、西洋中世史家の立場からは、東京書籍と並んでもっとも推奨したい教科書であると言って良い。ただし、他社よりも多くの紙幅を用いて中近世西洋史・イスラム史を扱っているが故に、他社の教科書では言及されない「修道院」や「ビザンツ帝国」といった概念が本文中にあらわれており、教師に求められる予備知識の量も必然的に多くなっている点には注意が必要である。現在の中学校教員が授業準備にあてられる時間が大いに不足している現状を考えるなら、こうした幅広い(そして指導要領では扱いない)分野については、さしあたり高等学校の世界史教科書や用語集などを用いて背景となる知識を得るという方法も有効だろう。

以上を踏まえ、教育出版の教科書を用いる際の注意点をまとめると以下のとおりとなる。

- ・西洋史においても中世に続く時代は「近世」と称されることを授業で補足する必要がある。その際には巻末の年表における時代区分もあわせて活用すべきである
- ・情報量が多く、予期せぬ角度からの質問に答える準備が必要となる可能性があるため、

⁽⁶⁵⁾ この教科書でも冒頭部分の「時代の分け方・年表の見方」の部分で原始から現代までの6区分が紹介されており、全体の章構成もそれに準じたものとなっている。教育出版『中学社会 歴史 未来をひらく』、2021年、5頁。この点を踏まえるなら、ルネサンスや宗教改革を扱う見開きの本文ないしはタイトルにおいて「近世」に言及すべきであろう。なお、「第5章日本の近代化と国際社会」の「第1節」のタイトルが「近代世界の確立とアジア」となっており、西洋(や他の世界の諸地域)における近代の始まりについては事実上明示されているとあって良い。

⁽⁶⁶⁾ 以前はルネサンスの部分で言及される「古代のギリシャやローマの文化」という文言に付された参照先の頁には、ギリシア文化についてのごく短い記述しかなく、また別のページで言及されているローマ文化の所はキリスト教の誕生と一緒に記述されていたため、ルネサンスにおいて復活したとされている文化がどういったものか、生徒が理解しにくいものとなってしまうていた。

教師は最低でも高校世界史教科書レベルの予備知識を有しておく必要がある

- ・三美神の比較の資料を用いる場合は、他社の教科書などから古代の三美神の資料を入手して、3つの図像を比較させる方がより効果的となる

東京書籍

この教科書においては、改訂に伴うページ増は8頁にとどまっており（全287頁から全295頁に増加）、他社に比べて分量面での変化は小さかった。各章のタイトルは、第1章が「歴史の流れをとらえよう」から「歴史へのとびら」へと、第7章が「現代の日本と世界」から「現代の日本と私たち」へと変更され、それ以外は旧版と同じく「第2章 古代までの日本」、「第3章 中世の日本」、「第4章 近世の日本」、「第5章 開国と近代日本の歩み」、「第6章 二度の世界大戦と日本」、「第7章 現代の日本と私たち」となっている。章のタイトルのレベルでは、東京書籍の教科書は日本史重視をもっとも鮮明に打ち出したものであると言える。ただし、本稿が主たる分析対象としている部分について見るなら、この教科書は全社の教科書の中でもっとも大きな変化が見られたものにあたる。具体的には、「第4章 近世の日本」の冒頭で中世ヨーロッパとルネサンス、宗教改革を見開き2頁で扱う構成から、同じく第4章の冒頭で中世ヨーロッパとイスラムの拡大に見開き2頁（「① 中世ヨーロッパとイスラム教」）、ルネサンス・宗教改革にも見開き2頁（「② ルネサンスと宗教改革」）が与えられる形になったため、当該部分の情報量が2倍に増加しているのである⁽⁶⁷⁾。この措置により、東京書籍の教科書は、教育出版と並んで、正規の頁において西洋中近世史にもっとも多くの紙幅を割いているものとなった⁽⁶⁸⁾。

まず「① 中世ヨーロッパとイスラム世界」の見開きから見ていこう。本文部分の構成としては、左頁上段に「中世のヨーロッパ」、左頁下段から右頁中段までが「イスラム世界の拡大」、右頁下段に「十字軍」が配置されている。これらの情報は旧版では「中世ヨーロッパ」という見出しのもとで2分の1頁のみの紙幅で扱われていたものにあたるが、新版では見開き2頁が与えられることで情報量が増加するとともに、適切な見出しのもとに

⁽⁶⁷⁾ 東京書籍『新しい社会 歴史』、2021年、100-103頁。

⁽⁶⁸⁾ また、「第3章 中世の日本」の「第2節 ユーラシアの動きと武士の政治の展開」の所に「①モンゴル帝国とユーラシア世界」の見開き2頁が追加され、ヨーロッパを含むユーラシア世界の一体化に関する情報が新たに追加されている。東京書籍『新しい社会 歴史』、2021年、74-75頁。モンゴル帝国の拡大に関する記述は、旧版では「1 モンゴルの襲来と日本」の一部として扱われていたものであった。この部分の情報量増大は新学習指導要領の要求に対応したものであろう。他方で、同じく新学習指導要領で扱いが明記されるようになったギリシア・ローマについては、旧版においてすでに見開き2頁が与えられていたこともあり、大きな分量増は見られなかった。「民主政」や「共和政」、「ローマ帝国」が新たに太字扱いになったのは、新学習指導要領を踏まえた変更であると考えられる。東京書籍『新しい社会 歴史』、2021年、26-27頁。

再構成される形となった。特に情報量が増えているのは、「イスラム世界の拡大」の部分に記載されたムスリム商人の活動やヨーロッパとの交流、イスラム世界の学問や文化についての記述である。また、「イスラム世界は、13世紀にモンゴル帝国の支配を受けました」という情報は他社には見られないものである⁽⁶⁹⁾。図像資料としては、左頁に「イスタンブールの天文台」と「イスラム世界の拡大」の地図、「アヤ・ソフィア大聖堂」と「サン・ピエトロ大聖堂」の写真がおかれ、右頁には「イスラム世界で発展した学問や文化」をまとめた表、「アズハル・モスク」と「イスラム世界のガラス工芸」の写真、「イスラム世界のコーヒーハウス」の絵、「ムスリム商人の交易路」と「十字軍の遠征」の地図が配置されている。これらの資料の多くは、旧版では特集頁に掲載されていたものにあたる⁽⁷⁰⁾。全体の構成や学習課題は、ヨーロッパとイスラム世界を対比的に捉えさせるようなものとなっているが、2つの世界の間の交流に関する情報も豊富に含まれており、現在の研究動向に照らしても記述内容に大きな問題はないと言って良いだろう。ただし、ここで扱われるオスマン帝国やムガル帝国の版図はこの見開き2頁におかれた地図の中には示されていないため、授業においては104頁の地図を参照させる必要がある。

これに続くのが「② ルネサンスと宗教改革」の見開きである。本文の構成としては、左頁上段に「ルネサンス」、左頁下段から右頁中段までが「宗教改革」、右頁下段に新たに追加された「近世への移り変わり」が配置されている。後述するように、「近世」が明記されている点は、東京書籍以外の教科書には見られない重要な変更である。図版資料としては、左頁に「ギリシャ・ローマ神話の三美神を描いた絵」(中世・古代の三美神と、ボッティチェリの「春」)、「レオナルド・ダ・ビンチの『モナ・リザ』」、左頁には「ミケランジェロの『ダビデ』」、「ラファエロの『アテネの学堂』」、「免罪符の販売」の版画、「マルティン・ルター」と「ジャン・カルバン」の肖像画、「1490年にドイツで作られた世界地図」、「羅針盤」の写真が、概ね叙述内容に即した形で配置されている。紙幅の倍増に伴って、記述内容も増えており、ルネサンスをもたらした要因として、「イスラム世界から伝えられた古代ギリシャの文化」のみならず、ペストの流行による「人の命や生きることの意味について」の「新しい考え」が言及されるようになった。宗教改革の部分にも、ルターとカル

⁽⁶⁹⁾ ただしこの部分にモンゴル帝国を扱った頁への参照指示が記載されていないのは残念である。

⁽⁷⁰⁾ 旧版では特集頁「深めよう 歴史の中のイスラム文化」の見開き2頁でイスラム関係の情報が詳細に扱われていたが、新版ではこの頁は廃止されており、イスラム関係の情報は正規の頁に組み込まれることとなっている。特集頁に含まれていた情報全てが新版に継承されているわけではないため、厳密にはイスラム関係の情報は減少している。ただし、東京書籍の年間指導計画作成資料では特集頁は授業時数に含まれておらず、多くの学校では授業で扱われない状況であったことが予想されるため、実際の教育現場では今回の改訂を通じて、イスラム関係の内容の取り扱いが増加するであろう。

バンがそれぞれドイツとスイスで活動したこと、「中世のカトリック教会には務めを果たさない聖職者もいた」こと、宗教戦争が起こったことといった情報が追加されている。「近世への移り変わり」の部分では、この時代における航海技術の発展にも言及した上で「ルネサンスと宗教改革、さらに大航海時代の始まりによって、ヨーロッパは近世と呼ばれる時代に入りました」と記載されている。

前稿において筆者は、東京書籍の教科書が西洋史の時代区分について生徒に混乱をもたらしかねない構成になってしまっているということを指摘したが⁽⁷¹⁾、今回の改訂を経た新版は、時代区分について旧版が抱えていた問題点の多くを解消することができていると言って良い。特筆すべきは、今回の検定を通過した全社の教科書の中で唯一、西洋史における「中世から近世への転換」を本文中で明確に扱っている点である⁽⁷²⁾。上で引用したとおり、この部分の記述には、ルネサンスや宗教改革などの一つの出来事や特定の年号が転換点であるという誤解を避ける工夫も見られ、短い文言で学界の標準的理解を伝えられるものとなっている。中世と近世（への転換期）を扱う見開き頁が分かれたこともあわせて考えると、この教科書では西洋史における中世と近世の混同が生じる余地はほとんどなくなったと言って良い。巻末の用語解説や年表をも併用することで、西洋史の時代区分のあり方とそれが意味することについて、生徒の理解はより一層深まるだろう⁽⁷³⁾。また、中世の部分の見開き頁に、ルネサンスや大航海時代につながる様々な情報がちりばめられているため、極端な断絶説とも一定の距離をとった形の流れが生まれていて、この点にも工夫が感じられる。教育出版の教科書と同様に、「ルネサンスと宗教改革」の単元を扱う際に、前時の内容と関係する展開を生徒自身に読み取らせるような授業づくりを行うことも可能だろう。

他方で、取り扱いに注意が必要な点もいくつか見られた。まず指摘すべきは、ルネサンスの部分に「古代ローマ」への言及がない点である。旧版では「東方との交流」を通じて持ち込まれたものとして、「忘れられていた古代ギリシャ、ローマの文化」が言及されていたのに対し、新版は「イスラム世界から伝えられた、キリスト教以前の古代ギリシャの文化」という表現に変わっているのである⁽⁷⁴⁾。「イスラム世界から伝えられた」ものにロー

⁽⁷¹⁾ 東京書籍『新しい社会 歴史』、2021年、75-76頁、79-80頁。

⁽⁷²⁾ なお、東京書籍の教科書では、西ローマ帝国滅亡後を「ヨーロッパでは中世と呼びます」ということも明記されている、東京書籍『新しい社会 歴史』、2021年、100頁。

⁽⁷³⁾ 冒頭の「時期や年代の表し方」の所では、古代から現代までの5区分を答えさせる課題が新設されている、東京書籍『新しい社会 歴史』、2021年、8頁。旧版では、「平安時代、鎌倉時代など」といった区分と並んで、「古代、中世、近世などの大きな区切り方もします」との説明のみがなされていた。

⁽⁷⁴⁾ 東京書籍『新しい社会 歴史』、2021年、102頁。

マ文化由来のものがないという理解に基づいた記述の変更なのかもしれないが、同頁註2の「古代の文化は、キリスト教との関係が弱かったため、中世の西ヨーロッパでは忘れられており、ビザンツ帝国やイスラム世界で受けつがれていました」という記述や、三美神の比較で「古代」として示されている壁画が古代ローマ時代のものであること（ただしこの教科書では「古代」とのみ記載されていて古代ローマのものであることは明記されていない）を考えると、古代ローマへの言及をあえて本文から削除する利点は少ないように思える。そもそもこの教科書本文の文言においては、ルネサンスと「古代」の関係自体が曖昧にされているが、教科書記述であることや教師に与えられた時間の短さ、三美神の比較で古代とルネサンスの共通点を答えさせようとしていることなどを踏まえるなら、他社で一般的なように、「ルネサンス＝古代ギリシア・ローマ文化の復興」と言い切ってしまうべきだったのではないだろうか。

また、見開き全体に対する「学習課題」が「イスラム世界と接したヨーロッパ社会は、どのように変化したのでしょうか」となっている点も問題である。帝国書院の教科書について指摘したように、この課題では宗教改革の部分をカバーできないだけでなく、こうした課題設定により、ルネサンスや近世への移り変わりといった出来事が、イスラム世界との接触のみによって生じたかのような誤解が生まれかねない。イスラム世界との接触は、ヨーロッパ世界に変革をもたらした要因の一つにすぎないのであり、教科書本文はこうした通説的理解を踏まえたバランスの取れたものとなっているだけに、因果関係の単純化につながりかねない不用意な学習課題が設定されていることはなんとも残念である。ここでは、「年間指導計画作成資料」の「学習目標」である「ルネサンスと宗教改革を通して、ヨーロッパ世界の変化の様子を理解する」に即した学習課題を課すべきであろう。

なお、今回の改訂を経ても、中世ヨーロッパの記述が教科書全体の中では「第4章 近世の日本」に含まれているという問題は解消されていないが、中世ヨーロッパ部分がルネサンス・宗教改革の頁の前史となっていることや、中世や近世といった時代名称を明記していることを踏まえるならば、この配置は最適解の一つであると見なしてよいだろう。

以上を踏まえ、東京書籍の教科書を用いる際の注意点をまとめると以下のとおりとなる。

- ・情報量が多く、予期せぬ角度からの質問に答える準備が必要となる可能性があるため、教師は最低でも高校世界史教科書レベルの予備知識を有しておく必要がある
- ・「ルネサンスと宗教改革」部分の「学習課題」は、宗教改革の部分をカバーできないのみならず、因果関係の単純化をもたらしてしまうため、教師自身が新たな課題を考える必要がある

- ・ルネサンスは古代ギリシア・ローマ文化の復興であったということを教師が明確に述べるのが望ましい（特に三美神の比較の資料を用いる場合）

山川出版社

高等学校の歴史教科書において圧倒的シェアを占めている山川出版社は、今回の新学習指導要領導入に伴って、新たに中学校の歴史的分野の教科書にも参入してきた出版社である。分量は全 288 頁であり、平均的なものであるが、他社教科書と比べて 1 頁に収められている文字数がかなり多いため、1 単位時間ごとに扱うべき情報量はかなりの分量にのぼっている。なお、世界史教科書分野で定評がある山川出版社であるが、各章のタイトルは「古代までの日本」、「中世の日本」、「二つの世界大戦と日本」など、世界史をほとんど意識しないものとなっている。冒頭の「時代区分の表し方」の所では、「社会による時代区分」として原始から現代までの 6 区分が紹介されており、各時代の具体的な特徴も（日本史に則してではあるが）説明されている。この部分の記述は、他社の教科書と比べても大いに充実しているものと評価できる⁽⁷⁵⁾。この教科書には巻末年表が付されていないが、「時代区分の表し方」の頁の下部に、世界の各地域（日本、朝鮮、中国、欧米）における時代区分のありかたを示す年表が示されている。「欧米」⁽⁷⁶⁾の時代区分を見ると、「中世～近世」、「近世～近代」、「近代～現代」の転換点は斜線でやや幅を持たせた形となっており、その時期についても概ね通説通りとなっている。古代から中世への転換期が 400 年ごろから 630 年ごろまでの時期とされているのはビザンツ帝国の事情をも念頭においた結果であろうか。ただし、後述するように、教科書本文では「5 世紀に西ローマ帝国がほろんだ後、ヨーロッパは中世と呼ばれる時代に入った」とあり、年表の記載とは齟齬が生まれている⁽⁷⁷⁾。またこの年表で、原始から古代への移り変わりが斜線ではなく直線で示されており、紀元前 2000 年に突如「欧米」が「原始」から「古代」に転換したかのような記述となっているが、ここは斜線で示すべきだったと思われる⁽⁷⁸⁾。

さて、この教科書の「うり」の一つは、主として特集頁に世界史に関する記述がふんだ

⁽⁷⁵⁾ 「日本の歴史の区分を、社会の仕組みが違うアイヌ民族や琉球、また世界の国や地域にそのまま当てはめることはできないので、注意が必要です」とも記載されている、山川出版社『中学歴史 日本と世界』、2021 年、6 頁。

⁽⁷⁶⁾ あえて「欧米」としている理由は判然としませんが、ここは他社で一般的なように「西洋」とすべきだったと思われる。

⁽⁷⁷⁾ 山川出版社『中学歴史 日本と世界』、2021 年、104 頁。

⁽⁷⁸⁾ 西洋における原始と古代の境目だけが直線で示されるという問題は東京書籍の教科書にも共通している。

んに盛り込まれていることである⁽⁷⁹⁾。西洋中近世史に関する情報を含むものとしては、「第2章 古代までの日本」の「3節 律令国家の形成」の最後におかれた「8世紀の世界」⁽⁸⁰⁾、「第3章 中世の日本」の「1節 1中世社会の成立」の最後におかれた「13世紀の世界」⁽⁸¹⁾、「第4章 近世の日本」の「1節 一体化へ向かう世界」の最後におかれた「16世紀の世界」⁽⁸²⁾があり、それぞれの時代の概略が簡単に記述されるとともに、見開きの世界地図と挿絵で時代時代の世界のあり方が視覚的に示されている。正規の頁の中に世界地図を組み込むのではなく、時代時代の世界地図を特集頁として提示する手法は、日本文教出版と学び舎も採用しているものであり⁽⁸³⁾、山川出版社のものもこうしたスタイルの教科書の一つであるといえる。なお、地図の頁には、時代時代の様々な出来事や人物、文化や技術が挿絵付きで掲載されているが、その具体的内容についての記述は見られないため、こうした頁を対象に1単位時間の授業を組み立てる場合には、教師の側にかかなりの準備が必要となる。挿絵で言及されている事項全てについて詳細に説明するのは現実的ではないため、特定の出来事に焦点を絞った授業とする、扱われている時代における世界のつながりのみに焦点をあてる、関係する正規の頁と組み合わせて参考資料としてのみ用いるといった形が想定される⁽⁸⁴⁾。

また、「13世紀の世界」の直前では、特集頁「歴史へのアプローチ②」として「東西ユーラシアの動き」が見開き2頁で配置されており、「中世ヨーロッパの文化と社会」、「イスラーム文化の広がり」、「西アジアのイスラーム諸政権と十字軍」、「十字軍のヨーロッパへの影

⁽⁷⁹⁾ 「世界史を充実させた教科書です。世界史の流れを理解しながら日本の歴史の流れをつかむことができます。各時代の世界の状況が一目でわかる頁も設け、楽しく世界を知ることができるような工夫をしています」、<https://www.yamakawa.co.jp/product/70901> (2021年11月17日閲覧)。以下で示す事例以外にも、「第4章 近世の日本」の「1節 一体化へ向かう世界」の中に「3ユーラシア大陸と海でつながる世界」という見開きがあり、「3つのイスラーム帝国」、「東アジアでの明の覇権」、「海でつながるアジアとヨーロッパ」についての記述が見られる点は特筆すべきである。これは新学習指導要領で扱いが明記された「アジアの交易の状況やムスリム商人などの役割と世界の結び付き」に対応するトピックであるが、他社の教科書と比較して極めて手厚い扱いとなっている。

⁽⁸⁰⁾ 山川出版社『中学歴史 日本と世界』、2021年、48-49頁。

⁽⁸¹⁾ 山川出版社『中学歴史 日本と世界』、2021年、80-81頁。

⁽⁸²⁾ 山川出版社『中学歴史 日本と世界』、2021年、110-111頁。

⁽⁸³⁾ 育鵬社の「このころ世界は」の頁も同様の事例と見なすことも可能だが、地図と図版中心の山川、文教、学び舎と異なり、育鵬社の「このころ世界は」は、文字による説明もかなりの分量を占めている。

⁽⁸⁴⁾ 「年間指導計画表」を見る限り、「8世紀の世界」は正規の頁が3頁に及ぶ「平城京と天平文化」を扱う1単位時間の中で触れる形となっている（つまり1単位時間で5頁分を扱う必要が生まれている）。さらに「平城京と天平文化」の見開きと「8世紀の世界」の見開きの間には、「正倉院宝物」の特集頁1頁と、「地域からのアプローチ①奈良」の見開き2頁も配置されている（この3頁分に関しては「指導計画表」中には一切扱いが無い）。実際の授業においてはこれらの特集頁は省略される可能性が高いと思われる。他方で、「13世紀の世界」と「16世紀の世界」は1回2頁のペースを維持できれば扱うことができる形の計画が示されている、<https://www.yamakawa.co.jp/product/70901> (2021年10月21日閲覧)。

響」が対応する図版や地図とともに詳述されている⁽⁸⁵⁾。特集頁ということもあり、この部分の記述は他社に比べても極めて詳細で、「スコラ学」や「ゴシック建築」、「騎士道物語」など、他社に見られない情報が豊富に含まれている。イスラム文化に関する記述も充実しており、「ギリシアの古典文献」の翻訳への言及があるほか、「十字軍のヨーロッパへの影響」の所では、ボローニャ大学やパリ大学における学問の発展や東方からの技術の伝播が描かれ、これらが「のちにルネサンスに大きな影響を与えた」と記載されている。このように、十字軍などの影響により中世の間に（14世紀以降に本格化する）イタリア・ルネサンスの準備が進められていたという理解は、西洋史においては通説になりつつあるものだが、中学校の教科書でこうした動きに明確に言及しているのはこの教科書だけである⁽⁸⁶⁾。

ここまで見てきたように、山川出版社の教科書では、特集頁において西洋中世史に関する情報が豊富に扱われているのであるが、正規の頁では、「第4章 近世の日本」の「1節 一体化へ向かう世界」の「1 ルネサンスと宗教改革」の見開き2頁の中で、西洋中世・ルネサンス・宗教改革をまとめて扱う形の構成となっている⁽⁸⁷⁾。具体的には、左頁上段に「中世ヨーロッパとキリスト教」、左頁中段から右頁中段にかけて「ルネサンス」、右頁中段から「宗教改革」というタイトルで各項目が配置されている。記述内容としては、「キリスト教の時代」とされている中世と「ギリシア・ローマの古典」を再生しようとした時代としてのルネサンスを対置しつつ、羅針盤の改良などの技術革新にも言及し、この流れとは別に宗教改革とイエズス会に言及する形で、2方向から大航海時代の単元に接合するスタイルをとっている。こうした流れは他社の多くの教科書も採用しているものであり、因果関係の過度の単純化もなく、一般的な通説に則ったものであると言って良いだろう。資料は左頁に、「サン＝ピエトロ大聖堂」、(ボッティチェリの)「春」、右頁に「モナ＝リザ」と「ダヴィデ像」及びレオナルド＝ダ＝ヴィンチとミケランジェロに関するコラム、「「贖宥状(免罪符)の販売」の版画、「ルター」の図像と「ルターの95提題」の抜粋、「宗教裁判(魔女狩り)」の絵画が掲載されている。これらの資料自体は他社の教科書にもよく見られるものであるが、資料に付されたキャプションや註、「用語解説」といった形で、

⁽⁸⁵⁾ 山川出版社『中学歴史 日本と世界』、2021年、78-79頁。「年間指導計画表」は、この2頁を1単位時間で扱う形となっている。

⁽⁸⁶⁾ これは一般に「12世紀ルネサンス」と呼ばれる動きであるが、この教科書の中では「12世紀ルネサンス」という語は用いられていない。「12世紀ルネサンス」については多数の研究が存在するが、こうした考えをはじめて提唱した、C.H.ハスキンス(別宮貞徳他訳)『十二世紀ルネサンス』、2007年、みすず書房と、比較的新しい、チャールズ・バーネット(阿部晃平・小澤実訳)「十二世紀ルネサンス」、『史苑』80-1、2000年、66-94頁だけを挙げておく。

⁽⁸⁷⁾ 山川出版社『中学歴史 日本と世界』、2021年、104-105頁。

平均的な教科書よりも文字情報が多い点は、この教科書の特徴として指摘できる。

ただしかなりの情報量を誇るこの教科書も東京書籍以外の各社と同様に、西洋史を扱う部分において「近世」に全く言及しないという大きな問題を抱えている⁽⁸⁸⁾。特に問題なのは、「1ルネサンスと宗教改革」の見開き冒頭部分で、「中世ヨーロッパとキリスト教」という見出しのもと、「5世紀に西ローマ帝国がほろんだ後、ヨーロッパは中世と呼ばれる時代に入った」と明記されていることである⁽⁸⁹⁾。冒頭で中世の開始時期が明示されていないが、その後の記述には中世のおわりも近世のはじまりも全く言及されていないせいで、この教科書を用いる生徒は、この見開きが「中世ヨーロッパ」の出来事を扱ったものであり、「ルネサンス」と「宗教改革」も（さらには続いて扱われる大航海時代も）「中世」に属する出来事だと誤解してしまうであろう⁽⁹⁰⁾。図版の配置についても、東京書籍の旧版の教科書について指摘した問題がそのまま当てはまる⁽⁹¹⁾。すなわち、「中世ヨーロッパとキリスト教」というタイトルの真上に配置されたのは、サン＝ピエトロ大聖堂の写真とボッティチェリの「春」であり、こうした建築や絵画こそが（さらには同じ見開きに掲載されたモナ＝リザやダヴィデ像が）「中世ヨーロッパ」を代表するものだという誤解をもたらしやすい構成になってしまっているのである。

また、この教科書では、ボッティチェリ「春」を古代や中世の三美神と並べる構成をとらず、中世の三美神は「東西ユーラシアの動き」の特集頁に配置しているため⁽⁹²⁾、資料の比較を通じて時代の転換に視覚的に気づくことも困難になっている。すでに述べたように、中世ヨーロッパを扱う特集頁でいわゆる「12世紀ルネサンス」に言及していることから、この教科書の執筆者はイタリア・ルネサンスのみを決定的な断絶と見る歴史像と距離をとろうとしているのだと思われる。あくまで推測の域を出ないが、中世の三美神をボッティチェリ「春」と同頁に載せない理由も、こうした対比により「中世＝暗黒時代」ともとれるようなイメージを生徒に抱かせたくはない（しかし中世とルネサンスの対比も行わせたい）という執筆者の葛藤によるものなのかもしれない。だがその結果生まれた教科書は、

⁽⁸⁸⁾ 山川出版社『中学歴史 日本と世界』、2021年、104頁。

⁽⁸⁹⁾ 他方で、「中世の日本」の章の中におかれた特集頁「東西ユーラシアの動き」においては、その開始時期・終結時期を明示することなく「中世ヨーロッパ」が扱われている、山川出版社『中学歴史 日本と世界』、2021年、78-79頁。

⁽⁹⁰⁾ なお、この教科書では「第5章 近代の日本と国際関係」冒頭が「1節 欧米諸国の近代化と日本への接近」となっており、啓蒙思想の所に「近代思想」という単語も出てくるため、生徒はこのあたりの時期に西洋史における近代が始まると理解できるようになっている、山川出版社『中学歴史 日本と世界』、2021年、156頁。

⁽⁹¹⁾ 森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」、75-76頁。

⁽⁹²⁾ ただし、「こうした絵画がそれ以前のもの（→p.78）と何が違うか考えてみよう」との記述とともに参照指示は付されている。

伝統的な時代区分も、最新の学説も学ぶことができない中途半端なものとなってしまっていると言わざるを得ない。そもそもこの教科書では、特集頁と正規の頁の2箇所ですべて「中世ヨーロッパ」が扱われており、中世ヨーロッパを極めて詳細に扱う特集頁のはるかあとになって「中世のはじまり」が言及される形になってしまっている。こうした構成も生徒には混乱をもたらしかねない。育鵬社のように中世ヨーロッパに関する記述を全て特集頁にまとめる方法もありえただろうし、イタリア・ルネサンスを中世との連続性で捉えさせたのであれば、特集頁の12世紀ルネサンスを扱う部分でイタリア・ルネサンスまでを網羅してしまう方法もありえただろう。

もう1つ指摘しなくてはならないのは、西洋中世に関する記述において、「ヨーロッパ」という語が事実上「西ヨーロッパ」のみを指して用いられている事例がいくつか見られる点である。実際のところこの問題は、他社の教科書記述にも散見されるものであるが、山川出版社の教科書は他社よりもビザンツ帝国など東ヨーロッパへの言及が多く、しばしば「東ヨーロッパ」や「西ヨーロッパ」という語も用いられている。こうしたことから、「ヨーロッパ」を事実上「西ヨーロッパ」の意味でのみ使って(しまっ)ている他社とことなり、それが東ヨーロッパをも含む概念なのかどうかはそのつど大きな問題となってしまうのである。「8世紀の世界」の頁⁽⁹³⁾では「ヨーロッパはフランク王国と東ローマ(ビザンツ)帝国が、それぞれ支配を築いていました」とあるため、ここでは西ヨーロッパに限定されない意味で用いられていることが明らかであるが、「ルネサンスと宗教改革」の頁⁽⁹⁴⁾における「5世紀に西ローマ帝国がほろんだ後、ヨーロッパは中世と呼ばれる時代に入った」⁽⁹⁵⁾や、「中世ヨーロッパで忘れられていたギリシア・ローマの古典が、十字軍など東方との交流により再び西ヨーロッパにもたらされるようになると…」⁽⁹⁶⁾、「ヨーロッパ各地ではカトリックとプロテスタントの対立が激しくなり…」といった部分では、「ヨーロッパ」の指す対象が曖昧になってしまっていると言わざるを得ない。

⁽⁹³⁾ 山川出版社『中学歴史 日本と世界』, 2021年, 48-49頁。

⁽⁹⁴⁾ 山川出版社『中学歴史 日本と世界』, 2021年, 104-105頁。

⁽⁹⁵⁾ この直後に「東ヨーロッパでは、東ローマ(ビザンツ帝国)がローマ帝国の伝統を引き継ぎ…」とあり、次の段落で「一方西ヨーロッパでは…」と続くので、この「ヨーロッパ」は西ヨーロッパに限定されない用法であるように思えるが、そのように解釈すると6頁の年表で古代と中世の境目が400年頃から630年頃までの幅を持っている理由がわからなくなってしまう。諸説あるにせよ西ローマ帝国崩壊以降を中世と考える時代区分は相当程度定着したものであるため、本文にこうした時代区分を明記するのであれば、年表における時代の転換点もそれに合わせるべきであったと思われる。

⁽⁹⁶⁾ 同じ頁の11行上には「東ヨーロッパでは、東ローマ(ビザンツ)帝国がローマ帝国の伝統を引き継ぎ…」という記述がある。執筆者の意図としては、「十字軍など東方との交流」という時の「東方」にはビザンツ帝国も含まれるのであろうが、その場合「中世ヨーロッパで忘れられていた」という時の「ヨーロッパ」は「西ヨーロッパ」と解釈しなくてはならなくなる。

以上を踏まえ、山川出版社の教科書を用いる際の注意点をまとめると以下のとおりとなる。

- ・西洋史の時代区分において、西ローマ帝国崩壊ごろ～ルネサンス・宗教改革ごろまでが中世とされており、それ以降は近世と呼ばれることを教師が補足し、「ルネサンスと宗教改革」の見開きの中の初めの部分（「中世ヨーロッパとキリスト教」）だけが中世に属し、「ルネサンス」と「宗教改革」は中世ヨーロッパの出来事ではないことを伝える必要がある
- ・「ルネサンスと宗教改革」の見開きに掲載された図像資料は全て中世ヨーロッパのものではないということを明確に伝える必要がある
- ・ボッティチェリ「春」と中世の三美神の比較を行ったり、ルネサンスにつながる流れを教えたりする際には、「歴史へのアプローチ②」の頁にもさかのぼりつつ授業を行う必要がある
- ・本文における「西ヨーロッパ」と「東ヨーロッパ」の使い分けを意識して説明するとともに、「ヨーロッパ」と記載されている部分については適宜教師が補足説明を施す必要がある
- ・情報量が非常に多いため、教師は最低でも高校世界史教科書レベルの予備知識を有しておくとともに、特集頁に関しては要点を絞って授業を準備する必要がある

学び舎

この出版社の教科書は、旧版において中世ヨーロッパやルネサンスの扱い自体がなかったため、前稿では分析の対象外としていたものにあたる⁽⁹⁷⁾。新版においても中世ヨーロッパに関する記載が一切ないことには変わりがないが、「第3部 近世」冒頭の章にあたる「第4章 世界がつながる時代」の「(1) インドに出現した船隊」の見開き右下に、「ルネサンス」のコラムが新設され、「ラファエロ『小椅子の聖母』」の図版も新たに掲載された⁽⁹⁸⁾。同じ頁の本文では、「キリスト教の改革とイエズス会」として宗教改革が扱われている。旧版では(1)としてスペインの中南米征服がおかれており、そこに「キリスト教の改革とイエズス会」も組み込まれており、(2)としてポルトガルのアジア進出が扱われていたのに対し、新版では(1)と(2)を入れ替えるとともに、宗教改革の記述をポルトガルのアジ

⁽⁹⁷⁾ なお、学び舎の教科書は今回の改定で頁数が削減された唯一のものである（全323頁から全299頁へと削減）。各章（この教科書では「部」）のタイトルは「第1部 原始・古代」、「第2部 中世」といった形で時代名のみを記載する方法がとられている。

⁽⁹⁸⁾ 学び舎『ともに学ぶ人間の歴史 中学社会歴史的分野』、2021年、89頁。このコラムの新設によって削除される形となったのは、「日中の交易を担った倭寇」に関する記述である。

ア進出の頁に組み込む形となっている。宗教改革に関する記述内容はザビエルの南インド・東南アジアでの布教について「あまり成果が得られず」という文言が付加された以外は、旧版とほぼ同一である⁽⁹⁹⁾。イエズス会が日本を目指したという記述がこの後扱われる鉄砲伝来の前史となっている点においても変わりはない。

この教科書においては、西洋中世に関する記載が一切なく、ルネサンスや宗教改革といったトピックは「近世」の章で扱われているため、時代区分に関して中世と近世を混同するような誤解が生じる余地はない。ただし、西洋史に関する記述の部分では、中世や近世といった時代名称は一切あられせず、巻末の年表における「時代区分」も日本史に即したもののと思われるため、そもそも西洋史に関する時代区分を教えることを放棄しているとも見なすことができる。それでも、冒頭の「歴史への案内」における「年代のあらわし方、時代の区切り方」⁽¹⁰⁰⁾に、原始から現代までの6区分が明記されていて、章構成もそれに習っていることを考えるなら、「一般に西洋史における中世はルネサンスや宗教改革とともに終わりを迎えたとされている」ということを授業の中で付言するのが望ましいだろう。なお、近代については、「第4部 近代」冒頭の章のタイトルが「第6章 世界は近代へ」となっているため、西洋を含む外国史一般において近代がはじまっていることが明記されている。

ルネサンスや宗教改革に関する記述内容は標準的な通説を踏まえたもので、大きな問題は見当たらないが、宗教改革の部分で言及される「カトリック教会」がどのようなものなのかについては、教師の補足説明が必要になるかもしれない⁽¹⁰¹⁾。また、ルネサンスのコラムにおいて、ルネサンスを生み出す前提として言及されるのは「古代ギリシアの文化やイスラムの科学技術」のみであり、古代ローマへの言及がない点も気になるところである。

4. おわりに

以上、本稿では新学習指導要領のもとで新たに刊行された中学校社会科歴史的分野の教科書における、西洋中世及び中世から近世への転換期を扱う単元を批判的に分析してきた。分析の結果あらためて明らかになったのは、この単元を実際に教えることの難しさである。西洋史家の立場から見ると、ルネサンスと宗教改革という全く異なる（しかし西洋史の理

⁽⁹⁹⁾ 学び舎『ともに学ぶ人間の歴史 中学社会歴史的分野』、2021年、89頁。

⁽¹⁰⁰⁾ 学び舎『ともに学ぶ人間の歴史 中学社会歴史的分野』、2021年、9頁。この部分には、地域や研究者ごとに区切る時期が異なることや、「〇年～〇年」などと、区切りよくあらわすことができないことも記載されている。

⁽¹⁰¹⁾ 学び舎『ともに学ぶ人間の歴史 中学社会歴史的分野』、2021年、89頁。この語はキリスト教の成立と発展を扱う頁では一切用いられておらず、この部分が初出となっている。

解にとっては欠かすことのできない) トピックを1単位時間で教えることだけでも至難の業と思えるが、教科書によってはそれらに加えてイスラム世界の拡大と西洋中世をも同じ時間の中で取り上げる必要が生まれているのである。実際の授業の中でどの程度教科書を用いるかは別としても、限られた時間の中でこれらのトピック全てを教える場合、多くの教科書が採用しているように、イスラム世界の拡大→十字軍などによる西洋とイスラム世界の接触→イスラム世界の技術や古典古代の知識の西洋への流入(及びイタリア都市の経済的興隆)→イタリア・ルネサンスという流れを用い、ルネサンスに際して発展した新技術が大航海時代においても一定の役割を果たしたという形で次の単位につなげるのが現実的であろう。その際に注意が必要なのは宗教改革の位置づけである。基本的に宗教改革はイタリア・ルネサンスとは別個の動きとして教えるべきトピックであり、十字軍やイスラム世界との接触もせいぜいその「遠因」の一つとしか言えないものであるため、先に示した一連の流れとは全く別の動きとして教えずなくてはならないのである⁽¹⁰²⁾。こうしてルネサンスと宗教改革についてそれぞれ別個に教えた上で、これらの出来事に続く時代が「近世」と呼ばれることを伝え、西洋中世と近世の間に生じた変化(カトリック的価値観からの脱却や新たな技術の進歩など)についてまとめるという形で1時間の授業を作っていくことになろう。なお、新学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」の実現のため、生徒自身による資料の読み取りなどの活動をも盛り込む場合、それぞれの時代の三美神の比較や、宗教改革に関する版画を活用することとなろうが、1単位時間で教えずなくてはならないトピックの多さを考えるなら、こうした資料の読み取りなどに時間を割く余地がなくなる可能性も高い。この単位については、指導要領上で扱いが明記されているのは宗教改革だけなので、(西洋中世史家としては心苦しいが)扱うトピックを一部に絞った授業を行う方法もありえるだろう。

さて、最後に今回の改定に際してほとんどの教科書で見られた頁増についてまとめておきたい。指導要領上で新たに扱いが明記されたギリシア・ローマやモンゴルの部分を別とすれば、今回の改定における頁増は資料や特集頁の充実に伴うものであり、教え込むべき事項が激増しているわけではない。資料や特集頁の充実は、新学習指導要領が「主体的・対話的で深い学び」の一環として資料の読み取りを重視していることへの対応と思われる。教師が用いることができる資料の選択肢が増えたこと自体は歓迎すべきことだろうし、各社の教科書の特集頁には、「主体的・対話的で深い学び」を意識した内容が多く見られ、

⁽¹⁰²⁾ 帝国書院の教科書分析の節も参照のこと。なお、イタリア・ルネサンスをもたらした要因を東方との接触だけに求めるような歴史像も全く問題がないとは言いがたいものであるが、与えられた授業時間の少なさを考えるならば許容すべき範囲の単純化であると考えられる。

歴史学者から見ても大いに興味深い内容も含まれていた。問題は、限られた時間の中で全ての資料に触れることが困難であることと、特集頁が多くの場合学習指導計画における時数外とされてしまっていることである。「主体的・対話的で深い学び」の実現のためにどの資料をどのように用いるのか、特集頁を扱うための時間をどのように捻出するのかについては、結局の所教師の裁量に委ねられており、その意味では教師の負担は以前以上に増加しているとも言える⁽¹⁰³⁾。多種多様な資料や特集頁の活用法についても、専門的知識を有する歴史学者が、現場の状況をしっかりと把握した上で具体的な提案を行っていく必要がある⁽¹⁰⁴⁾。

(本研究は JSPS 科研費 19K02878 及び北海道教育大学重点分野研究プロジェクトの助成を受けたものである。)

⁽¹⁰³⁾ こうした点については津田拓郎・コンラート＝フレンツェル「中学校社会科歴史的分野における『主体的・対話的で深い学び』をめぐる諸問題」でもとり扱う。

⁽¹⁰⁴⁾ 例えば多くの教科書が掲載している 8 世紀の世界の地図は、西洋中心主義的歴史像を打破する可能性を秘めているものとして注目に値する。この点については、津田拓郎「8・9 世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国」、『史学研究』第 308 号、2021 年、1-38 頁（特に補論の「わが国における世界史教育と西欧中心主義」、21-24 頁）を参照。